

25時行動委員会・富山

通信 2

2015.6.17

25時行動委員会・富山

(090-7744-0122 藤岡)

E-mail:25h.action@gmail.com

Url:http://25h-action.blogspot.jp/

● 25時行動委員会：企画・2 - 「アンケート」のお願い

25時行動委員会では、「戦後70年安倍談話に抗う—列島住民からのアピールは可能か」という企画を、8月に向けて用意しています。その準備を進めるうえで、一緒に考えていただければと思います。次のことにお応えください。

- 1.敗戦／戦後の70年間でなされた、日本国家の「植民地支配・侵略戦争・その戦後処理」についての「反省」の内、あなたが最もこころひかれたものを、あげてください。
- 2.敗戦／戦後70年のいま、あなたが創り出すべきだと考える「反省」のスタイルは、どのようなものでしょうか？
- 3.あなたは、いま「(日本)列島住民」を主語とする「反省」のスタイルの可能性を、どのようにお考えでしょうか？
- 4.私・たちは、未生の「列島住民社会憲法」の「前文」へ向けて、〈前註〉をつけることを試みたいと考えていますが、その試みに参加していただけませんか？

なお、この企画の趣旨などは、以下をご参照ください。

25時行動委員会 E-mail:25h.action@gmail.com

● 25時行動委員会：企画・2 — 資料

- + 丸川哲史+成田龍一「東アジア共同体を作る」(「週刊読書人」2015・4・10)
- + 安倍首相「建国記念の日」メッセージ 2015・2・10
「バンドン会議60周年」スピーチ 2015・4・22
「米国議会」演説 2015・4・29
- + 「8・6ヒロシマ平和の集い2015—検証：被曝・敗戦70年—日米戦争責任と安倍談話を問う」

- + 米国の学者8人、「私なら70年談話をこう語る」（『週刊ダイヤモンド』2015・5・15）
- + 「根本から変えよう！」（樹花舎 2011）
- + 「憲法の論じ方を変え、改憲論を斬る」（『ピープルズ・プラン』2001・4）

● 25時行動委員会：企画・2 — 趣旨

敗戦70年、私たちは、この列島の未来にかかわる歴史の大きな分岐点—この列島の未来を、自分自身の手で創り出すのか、「(大日本) 帝国」の幻想にとりつかれた者の手にゆだねるのかという分岐点に、立っています。私・たちは、その幻想にとりつかれた者と無理心中するわけにはいかない、いわんや、この列島の未来をゆだねるわけにはいきません。

敗戦70年、この列島の未来を自分自身の手で創りだそうとするのであれば、私・たちは先ず何よりも、私たちの、日本国家の「植民地支配」・「侵略戦争」についてのこれまでの「反省」の「反省」にたって、これまでとはまったく異なる「反省」のスタイルを創り出すことができるかという〈問い〉—ダレガソノ〈問イ〉ヲ私タチニ投ゲカケテイルノカ！！—の前に、自分自身を立たせなければならないのではないか、と思います。—なお、「反省」とは、「反省—究明—謝罪—補償」という—続きのプロセスを意味しています。

敗戦70年、世界、とりわけ、アジア・太平洋地域の人々が、日本国家の宰領者がどのような「反省」を行うかに、重大な関心を抱いています。むろん私・たちが、それに向かって厳しい「注文」を着け、厳しく監視しなければならないことは言うまでもありません。しかし、それにとどまらず、私・たちは、戦後初発の「日本国憲法」やいわゆる「東京裁判」に始まり、「脱冷戦」期に入ってから「首相談話」にいたる日本国家の「反省」のありかたを「反省」しなければならない、と強く思います。

敗戦70年、私・たち、〈25時行動委員会〉は、「私・たちは、〈列島住民〉を主語とする「反省」のスタイルを創り出すことができるか」という課題に挑戦したい、と思います。それは、「列島住民とは誰か？」を問い明かすことから始まる・・・
・・・のかもしれませんが・・・どうか一緒に考えてください。

● 25時行動委員会：企画・2の実現へ向けて

- A. 「首相談話」の性格を考える
- B. 「反省」の系譜をたどる
- C. あなたのスタイル
- D. 「日本国民」を主語とするスタイルの問題性を考える
- E. 「列島住民」を主語とするスタイルの可能性を検討する
- F. 「朝鮮人はあなたに呼びかけている」(チエ・ジンソク)へ応答する
- G. 未生の「列島住民社会憲法」・「前文」への〈前註〉を試みる

● D, E, F, Gへの註

**## 「列島住民」を主語とするという前に……私・たちは「日本人」
・「日本国民」を主語とする「反省」をどうするかという問題に向き合
わなければならない**

+ 「日本国民／日本人」を主語とすることをパスした「アピール」にまず列島に居住する他の住民が、同時に、世界の、なによりも、アジアの人々が耳をかすだろうか？とりわけ、「歴史修正主義」の強風が吹くなかで。

+ 大江健三郎ではないが、「このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」という問いを問いつめ問い詰めることの果てに、「国民国家」としての日本の底をやぶること＝「日本の構成的解体」の路につき、「もうひとつ別の日本」の創出へむかう……そのいとなみが見えるものにならないかぎり、アジアの人々の耳にとどくことはない。

+ しかし、「日本という国民国家」の底を破る営みは、私・たちとこの列島に居住する他の住民との共同の営みとして進められるいがない……。こうして、私・たちは、改めて「日本国民／日本人」を主語とするという出発点へ送り返される。

「列島住民」からの「アピール」を可能とするためには……

+ 「植民地支配と侵略戦争の忘却・隠蔽から、未来を拓く真実究明・謝罪・補償へ」という「反省」の手続きを踏み、さらには「日米同盟をこえて東アジア

「ア民衆連帯へ」の路の端緒なりとも拓いておくことが不可欠だろう。しかし、改めて言うまでもなく、これはとりもなおさず「21世紀の安保闘争」の課題にほかならず、とりわけ前者こそ、まさにいま考えるべき「アピール」の内実として明示すべき当のものである。

この矛盾をどうするか？—まさにここに、私・たちが「安倍談話」に対峙して「列島住民からのアピール」を表明しなければならない所以があり、私・たちが「列島住民ニナル」ことへ挑戦する契機がある。

+言うまでもなく、上で触れたことは、私・たちが踏むべき手続きの一半であり、もう一半は「血統主義の国民主権」から「居住地主義の列島住民主権」へいたる路を拓くことである。この後者もまた、私・たちのうちで自己完結しうるものではまったくなく、前者の「反省」の手続きを折り返して、この列島の「日本国家」としての構成を解体する手続きに接続することであり、その営みは、列島在住の「日本国民」以外の全ての住民との共同のものとして進められる長期にわたるプロセスである。

+こうして、「列島住民からのアピール」という発想は、私・たちを大きな課題の前にたたせることになる。未生の「列島住民社会憲法」「前文」へむけての〈前註〉とはまさに、この巨大な課題へむけての、私・たちの「決意表明」であるいがいない。

+このだんにおよんで、以上のようなことを問題にしなければならないことは、私・たちは言うにおよばず、この列島の社会運動圏じたいの再=確立という大きな、しかし、死活の問題のありかを指し示している、と言うべきなのだろう。

案内 敗戦70年：私・たちの「反省」のスタイルを創造する
8月の「首相談話」に対抗する：
私・たちのパフォーマンスを準備する

日 時：2015年7月12日（日） 午後1時半～4時

場 所：サンフォルテ 302号室